

### こだわりの60年 その3

神無月も今日で終わる。神様が出雲からお帰りとなる。出雲では、10月は神有月というそうだ。

今の教職員に、直接教鞭をとったものが4人存在する。当時授業で言ったことや、授業の中身について細かに覚えており、まずは赤面の至りである。

授業だけではない。文化祭や、部活動や、教員採用時の対応や、教員になってからの指導や、様々なところで、お互いの関係がシンクロしているので、「先生はあんときこんなことを言っていましたよね」などと時折脅かすものだから、びくびくすることこの上ない。

それでも、譲れないものは譲れないのでとずっと言ってきたので、そんな私のありようについては、みな共有していると思う。かえって私の今について、一番厳しい目をもって見ていてくれているはずだ。だから、なにも妥協はしまい。

同級生からも、きっとそんな目で見つめられていると思う。「俺、数学を捨てるかもしれない。」と相談すると、「妥協すんのかよ。」と厳しく突き放してくれたおかげで、何とか数学が身についた。言った本人は、すかさず数学からは身を引いて、私立文系に邁進していたのだから、理不尽この上ないが、「俺は妥協したのではない。」「冷静に戦略を練ったのだ。」とうそぶいており、「はいはい。おっしゃる通りです。」と返すしかなかったのを思い出す。

それぞれが、いろんな思いを抱いて進んできた60年だろう。

我々の世代は、親が戦争を体験し、戦後の混乱期を乗り越え、家族という神話の中で育てられた世代である。右肩上がりの世の中も手伝って、努力することは報われると、言われ続けて、そうだとその通りだと何も疑いもせず、夜昼なく、自己伸長を夢見て功成り名を遂げたものもたくさんいる世代である。

その家族や家庭が、一つの大きな物語で、今や神話も崩壊し、これからの家族や家庭については、大きな決断を強いられるものが中にいるという世代でもある。

故郷や、ノスタルジーという神話も崩壊し始めた。この期に及んで、これからの里山を維持する方策がない。里山によって維持されてきた暮らしを維持する人の数が足りない。人がいなくなるというおぞましい現実が突き付けられている。

地域のコミュニティも人がいないのでどうしようもない。あと20年たったら、近所に子供が一人もいなくなる。コドモどころか、大人もいなくなる。その解決策を早く見出さなくてはと考える毎日である。

方策はないのか。いやきっと埋もれている。もう一度、人が人を呼び田園があり、人のつながる街があり、コミュニティがある時代を取り戻そう。